



「ともによろこびをもつて」

—日本の教会としての目覚め—

森 一弘
司教

1987年に開催された第一回ナイス(福音宣教推進全国会議)から20年の歳月が経ちました。それについての評価は、人によってさまざまですが、私は、個人的には、それは日本の教会の歴史にとっては画期的なものであった、と判断しております。ナイスの意味とその価値を理解するためのキーワードは、「日本の教会の具現と信仰のありようの転換」です。それは、1982年12月の臨時司教総会で可決された「日本の教

会の機構改革」の「前文」の第8項に、その狙いとともにはつきりと示されています。

「福音宣教推進全国会議に、司教・修道者・信徒が参与することにより、日本の教会に対する神の民全員の共同責任の実現を図る」

この「日本の教会の機構改革」は、「日本の教会はこのままではいけない……何とかしなければ」という当時の司教たちの熱い思いによってまとめられたものです。そのときの

司教たちが思い描いていたものは、「日本の教会の具現」です。その思いは、「前文」の第4項に明記されています。

「視点を自己の教区、自己が所属している信仰共同体に限る事なく、日本の教会全体を視野に収め、各教区の独自性を保ちつつ、日本の教会全体の成長のために、共同で責任を負い、共同の作業を展開するように要請される」

条文は一応各教区の自立性、主体性には配慮していますが、その時の司教たちの頭の中を占めていたものは、教区・修道会などが、それぞれ自分の枠の中にとどまっている限り、教会は、キリストから委ねられた宣教という重い課題を、日本社会では十全に果たしていくことは出来ないという切実な認識だったと思われるます。

司祭たちの高齢化と召命の減少、宣教師たちの減少、受洗者の数の横ばいなどなどの否定的な現実が、日本各地の教会に目に見えるような形で現れてきておりました。

またその一方で、当時の日本社会は、経済的な豊かさを求めてひたすら走り続けていました。しかし、陽

があれば、陰があるものです。経済的な繁栄を陽とすれば、陰は人々の心の空洞化です。子どもたちも大人たちも厳しい競争で、疲れ切り、その精神は消耗しきっておりました。そんな状況の中で、次から次へと新・新宗教が誕生していました。それは、人々が、必死になって、光と支えを求め始めていたことの現われでもあります。

人々の間に宗教へのニーズが高まっている、それにもかかわらず、カトリック教会の門を叩く人は少ない。それには、カトリック教会の方に、人々を引き寄せることが出来ない何かがあるはずだ。司教たちは、各日本社会の人々が直面している状況を識別し、ナイスの開催を断念したのです。そこに聖霊の特別の導きがあったといっても言い過ぎではないでしょう。

☆ ☆ ☆
事実、ナイスは、その準備段階から、日本における教会全体のありようを見直していく運動に発展していきましました。

ナイス開催の前年に、司教団は、日本の教会には『生活と信仰の遊離』『教会と社会の遊離』の問題が横た

わっていると識別し、「どこか遠いところであつた」信仰様式にむりやりあわせる努力をしようののではなく、生活と日本社会を見つめながら、信仰の態度を改め、それを育てなければならぬ」というメッセージを出します。

ナイスの直後には、日本の教会の信仰の生き方や、ありように根本的な転換をよびかける文書をまとめます。

「信仰を、掟や教義を中心とした捉え方から、『生きる』こと、しかも共に喜びをもって生きること」を中心とした捉え方に転換したいと思います」（ともによるよびをもって生きよう）より。1988年

非常に簡潔で、大胆な呼びかけです。

ナイスを通して司教たちが提起した問題や呼びかけた課題は、20年後に生きる私たちの課題でもあるのではないのでしょうか。

長崎教区は邦人司教区設立八十周年を迎えたと伺いました。おめでとうございませう。

その重厚な80年のうちの最後の20年間にあつたのみしたためましたが、時代検証のため参考にしていただければ幸いです。



Q & A

「時代の検証」

邦人司教区設立 八十周年に寄せて...

Q. 長崎教区が、パリ外国宣教会からその司牧を引き継いで、邦人司教区となって、今年で80年を迎えるということは知っていましたが、それが福音宣教推進全国会議（ナイス）と、どのようななかかわりがあるのですか。

A. 長崎教区が邦人司教区として自立して80年、ちょうどその中間時点である、1965年に公会議が終わり、時代は劇的転換点を迎えました。さらに、後半の40年のほぼ中間に、日本教会版公会議として位置づけることもできる、ナイス（1987）が開かれました。

この会議の第二回目は1993年に長崎で行われました。

そうすると、第一回ナイス開催からちょうど20年目にあたる今年、この20年を省みることは、公会議後40年を検証することにつながり、さらにそれ以前の40年と、どのように違うかを考えるきっかけになるのではないかと思います。

時代とか、世の風潮とは全く別の世界にこもり、閉鎖的教会づくりをすることは、今やゆるされません。

かと言って、社会問題とか時代の流れ、あるいは時代感覚に合わせて、教会運営をしようとする、世の風潮に流されているとか、流行を追いかけているなどと非難されます。

だから、的確に時代を洞察し、そこに「時のしるし」つまり、神がこの時代に何を望んでおられるかをよく黙想し、学び、これを実行に移していく必要があるのです。

Q. この80年の中間に公会議があつたということですが、その公会議の前と後では、どんな変化があつたのですか。

A. わたしたちの目の前の現象として現れた変化は、ミサの時、司祭が信者席に背を向けて捧げているのに、



出津教会（ド・ロ神父の建立）

公会議後は「回れ右」して、参加者と向かい合つて、祭壇を囲むようになったことではないでしょうか。

今では、その「回れ右」の事実を知る人も、少なくなつてゐると思ひますが、この「回れ右」は時代の変化を表わす、とても象徴的な動きだったので。というのは、体の180度回転のみならず、発想の180度の転換を突きつけたものだったからです。

信徒の皆さんと一つの祭壇を囲み、キリストの体をいただくと力が湧いてきます。力をいただいた方々は自然の流れとして、参加し、交わり、聖堂の正面のドアを開いて、社会に向かつて飛び出していくようになります。

公会議は、はじめに典礼について話し合い、「典礼憲章」を発表しました。そして最後に、現代社会にどのようにして奉仕するかということについて話し合い、「現代世界憲章」を發布しました。

全部で16の公文書をまとめて、世界に向かつて発表し、これからの教会の進むべき道を示したのです。典礼に与る者は、社会に向かつて出発します。社会のさまざまな問題に向かい合う人は、典礼に与ることなしに、それが不可能なことを悟ります。このバランスが崩れると、教会はゆがんだものになります。

Q. 180度の方向転換と言われてもピンと来ませんが、それは具体的にどうということですか。

A. そのことを、自分の現実感覚として受け止めるために、役立つキーワード（鍵となることば）は、第一面で森司教さまが書いてくださった「ともに」といふことばではないでしょうか。

わたしたちは、だれかの「ために」祈ります。とてもすばらしいことです。そこからさらに踏み込んで、相手と「ともに」祈ることになると、もつとすばらしいことになります。

「ために」と言つてゐる間は、見守つてあげるという、見下すようなことにならないまでも、相手とは違う場に自分をおいて、痛みもなく、無傷ですすますることもできます。「ともに」ということになる、相手の目線、相手の息づかいが聞こえるような場に、自分をおくことになりますから、発想が変わり、傷つくことさえ引き受けることになります。

社会に対する見方も、まるで変わつてきます。これまでカトリックでない方々を「未信者」と言つたり、「俗世間」などと言つて、汚らわしいとでも言いかねない考え方がなかつたでしょうか。

神の「光あれ」ということばを吹き込まれて創造された世界を、あたかも悪魔の巣のように見てはならないことは言うまでもありません。

ですから、カトリックであれ、そうでない方々であれ、すべての人は、神の光をたたえてゐるのです。

全世界は神の輝きに満ちています。ただ、現実には、人間の欲望とか野心とか、社会構造のためにカバー（隠されて）されて見えなくなつてゐます。

ですから、神の光、それはすなわちキリストの福音なのですが、それが見えるようにすること、つまり、ディスプレイ（カバー）を取る・発見する）する必要があります。

この作業のことを福音化（エバンゼリザチオ）と言います。

Q. 来年行われる列福式や教会群の世界遺産候補リスト入りなど、いま歴史の検証に関わるものが盛んになっていますが、これらの動きは、長崎教区の未来を切り開くものになるのでしょうか。

A. 故ヨハネ・パウロ二世が「過去を振り返ることとは、未来に対して責任を持つこと」と言われたように、これらの歴史的出来事を、未来を切り開くものにならなければなりません。

すべての歴史は現代史であると言われるように、過去の歴史は、現代という時点から、現代の人々の目が捉えたものです。

現代に生きる、わたしたち自身の目を研ぎ澄まして、今の時代に生かすものを、汲み取らねばなりません。

過去を振り返つて、あの時代は良かったといつて酔い知れることには、殉教者たち自身が反対するでしょう。

過去と現代では、困難の質と度合いにおいて異なるものがあります。しかし、困難があると、いうことでは共通です。

そこで、どのようにしてそれらを克服したのか、どのようにして「ともに」をつくり上げたのか、その検証こそなされるべきでしょう。



新しい要理

「共に歩む旅」(9)

第五課 「信仰と神の約束」



【進行係】(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)

「どなたか祈りで神さまをこの集いに招いてくださいませんか。」

(誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい)

- ・主よ、この集いに来てくださり、私たちの心をあなたの愛で満たしてください。
- ・主よ、ここにおいでくださり、私たちの鈍い心を柔らかくしてください。

A. 私たちの生活

【進行係】

「どなたか次の話を読んでくださいませんか。」

1997年3月9日朝、いつものように平凡な職場生活の一日が始まったのですが、しばらくして、社長室に呼ばれた私は、青天の霹靂、周囲が崩れ落ちるようなことを聞かされることになりました。

それは解雇通告でした。その瞬間、私はあたかも盲人がろうあ者になったように、何も見えず、何も聞こえない状態になってしまいました。

これまでも仕事がなく、仕方なく街を彷徨している人々の姿を、新聞やテレビなどのメディアを通して見てはいました。が、いざわが身にふりかかると、ここから逃げ出して、どこか遠くへ隠れてしまいたいと思いました。

ふと「死」がよぎることもあり、私をこんな目に合わせた人々に対する恨みが沸いてきたりして、なかなか混乱から抜け出すことができませんでした。そんなある日、同じ立場になってしまったある隣人と出会い、自分が感じる同じ苦しみ、その人の中にもあることを発見しました。

お互いの沈黙が対話へとつながり、そこからまた新たな希望と愛の芽生えへと、自分たちが少しずつ変わっていくのを実感しました。

徹底的に捨てられたさびしい隣人にとって、「いつしよにいい」ということよりもっと大きな愛の妙薬はない、ということを知るようになりました。

自分一人では抜け出すことができなかつた苦しみを、神が隣人愛で克服するようにはからってくださいましたことを、黙想と祈りの中で少しずつ感じるようになってきています。

【神に捧げる手紙】から

【進行係】(参加者たちに質問する)

①「解雇通告を受けた時、この方はどんな反応を見せましたか。」

②「この方は失業の苦しみから、どのようにして抜け出すことができましたか。」

B. 神のことば

アブラハムは今から約4千年以上前の人物です。彼は神の呼びかけに応じて、自分が持っているすべてのものを捨てて旅立ちました。アブラハムにとって神はすべてでした。そんなアブラハムの姿は信じる人々の模範です。信仰とは神に完全な信頼をおいて、新しい道に向かって勇氣を持って旅立つことです。

【進行係】

「どなたか創12・1・5(神がアブラムを呼ばれる)を読んでくださいませんか。」

・・・聖書を読む・・・

「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

・・・聖書を読む・・・

「次の聖書の句を一人ずつ順番に祈るような心で読んでくださいませんか。」

「父の家を離れて」(3回)

「私が示す地へ行きなさい」

(3回)

「あなたを祝福し」(3回)
「旅立った」(3回)

【進行係】(参加者たちに質問する)

① アブラハムが神の呼びかけを受けた時、すべてを捨てて旅立ったのはなぜですか。

② アブラハムが神の呼びかけに応えることができたその根元には何があったと思いますか。

アブラハムが神の呼びかけに従うことができたことは、愛である神に対する完全な信頼があったからです。彼は生きておられる神が、自分の人生をよい方向に導かれると固く信じていました。だからアブラハムは、今まで自分が信じて寄り掛かっていたことから離れて、神のみ言葉に従いました。このようなアブラムの信仰は、現在に至るまで信仰者の鑑になっています。

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創

造され、従って、いま目の前に見えているものは、目に見えないものから創られていることを悟るのです。(ヘブ11:1-3)

【参考聖書】

*創世記 17・1・8

アブラハムが神と契約を結ぶ

*創世記 22・1・18

アブラハムがイサクを捧げる

*ヘブライ 11・8・19 信仰



C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

神は私たちを自分の子どもとして、祝福しておられます。神についての私たちの信仰はどのようなものでしょうか。

【進行係】(参加者たちに質問する)

① あなたは今まで何を信じ、何を頼りに生きてきたと感じていますか。

② 私たちは、いま信仰の旅を始めました。信仰の道をよく歩いて行くために、私たちが捨てなければならぬものは何ですか。また信頼しなければならぬものは何ですか。

【進行係】

聖母マリアへの祈りをささげながらこの集いを終わります。

【進行係の心得】

* 「信」という漢字は、「言」の横に「人」が寄り添っている形をしています。言とともにある人、これが信じる人なのです。

* 「言は人となって、わたしたちのうちに住まわれた」(ヨハネ1:14)。信仰者とは、神のこゝとばと生身の人間が一つになったキリストとともに旅す

る人とも言えるでしょう。

【覚えましょう】

19. ミサはどのように「制定」されましたか。

* ミサはイエスさまの最後の晩餐で制定されました。

20. ミサはいくつの部分から成り立っていますか。

* ミサは「ことばの典礼」と「感謝の典礼」の二つの部分から成り立っています。

21. 「ことばの典礼」はどのような部分から成り立っていますか。

* ことばの典礼はみことばの朗読と説教と共同祈願から成り立っています。みことばの分かち合いは、これを日常生活と結び付けるものです。

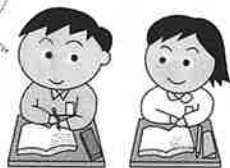
22. 「感謝の典礼」はどのような部分から成り立っていますか。

* 「感謝の典礼」は、奉納、奉献文(感謝の祈り)、聖体拝領から成ります。「キリストの体」をいただいでわたしたちはキリストと一つになります。

「発達障害」を知る (5)

西村良男

そうだ「失敗は成功のもと！」



太郎くんは、よくがんばったね！



第三部 アスペルガー症候群

(高機能自閉症)

「自閉症」という言葉は今では広く知られていますが、その内容については十分とは言えません。自閉症は他人との意志疎通がうまくとれず、集団で遊ぶことが苦手でこだわりが強い、等の特徴がありますが、これらは性格的なものでも、心を閉ざす病気でもありません。基本的には、他人とうまく付き合えない「障害」だと言われます。

アスペルガー症候群は、この自閉症の一つです。知能や言葉の遅れがないため、乳幼児検診等で見逃され、小学校に入ってから分ることが多いようです。

知的障害がなく言葉の達者な自閉症と言われるアスペルガー症候群と閉症と言われる高機能自閉症は、医学的には分けられています。この二つには子育て上の大きな違いはありません。

例1 発音通りに受け取るケン君

ケン君は一歳半検診や三歳検診では、特に何も指摘されませんでした。難しい言葉をよく知っており、おしゃべりも上手な普通の子に見えます。しかし、「何度言えばわかるのー」と叱られると、「何回言われればわかるのかなあ」と、真剣に考えます。また、音楽に合わせて踊るダンスは全く苦手です。

「ケン君への対応」

ケン君は複数の意味を持つ言葉が苦手です。「何度言えばわかるのー」と遠まわしの言葉で叱るのではなく、「しなさい！」とはっきりと伝えます。「運動会、どうだった？」ときかれても、運動会の何の事を尋ねられているのかわかりません。紛らわしい言葉や曖昧な言い方は避けて、簡単な言葉で分かりやすく伝えます。また、分ってもらおうとして大きな声で言うと、怒られていると勘違いしてパニックを起こすこともあります。

また、自閉症の子たちは二つ以上のことを同時に行うことが苦手です。音楽を聴きながら、先生の動きを見て、先生と同じ動きをするという三つのことを同時に行うことはできません。しっかりと聴いて音楽を覚え、先生を見て動きを覚え、パートに区切って踊りを身につけ、その踊りに音楽を合わせるなどの工夫が望まれます。

「アスペルガー症候群の特徴」

アスペルガー症候群の子は、知的な遅れは感じられないのに、妙に理屈っぽい子、特定の分野で物知りな子、勝敗にこだわる子、一つことに熱中し過ぎる子、相手が傷つくことをよく言う子、大きな音を怖がる子、時々パニックになる子など、どこか一風変わった子に多く見られます。その特徴をまとめると、

- ・ 知的な遅れは目立たない
- ・ 言葉を発音どおりに受けとる
- ・ 規則や時間等にこだわる
- ・ 相手の気持ちをうまく感じ取れない

・同時に二つ以上の事ができづらい等があげられます。

例2 勝ちにこだわる太郎君

太郎君は校則をしつかり守り、仕事もきちんとこなします。ただ、「一番になること」にこだわります。ゲームに負けるとよく怒ります。テストで百点を取れないと機嫌が悪くイライラします。百点が取れない人間はダメ人間だと思っているくらいで、「こんな易しい問題もできないの？」など、相手が傷つくことを言って怒らせたりします。また、校則を守らない子をひどく責めて、トラブルになることも度々です。そんな時、自分は正しいことを言っているのに、なぜ、みんなが自分に冷たく当たるのか理解できないようです。

「太郎君への対応」

太郎君のこだわりをなくすことは難しいことです。そこで、担任の先生は伏線を敷くことにしました。「今度のテストは難しいから、百点

はいないだろう」と言ってテストをします。また、百点を取れなかったときも、「太郎くんは、よくがんばったね」と誉めてから答案用紙を返します。太郎君は、「仕方がないや」と自分に言い聞かせることができるようになりました。

勝敗にこだわることについては、「人間には負けることも大切だ」とか、「勝負に負けても悪い子ではない」と常々話し、「失敗は成功のもと」とを合言葉にしています。太郎君が勝負に負けた時は、「失敗は？」と太郎君に聞き、「成功のもと」と太郎君がすかさず答える訓練を重ねました。また、校則を守らない子とトラブルになった時は、「校則を守ることは良いことだ」とまず肯定し、「場合によっては守れないときもある」ということも併せて教えます。

四歳くらいになると、他人の行動を見て、その人が「何を思い、どうしようとしているか」を推測できるようになります。しかし、アスペルガー症候群の子は、人の心を推し測ることが苦手で、正直過ぎて相手が

傷つくことも言ってしまいます。こんな子には、相手の立場に立って考えることを、その都度、丁寧に教え込みます。教えなくても自然に身につくと思われる常識的なことも、一つ一つ教えて身につけさせます。「一を聞いて一だけを知る」と言われるほど、自閉的障害の子は応用に弱いのです。

「留意点」

私たちが考えもしないような、ごく当たり前のことが分っていないなかつたり、つまずいたりしていることがあることに、常に留意する必要があるります。

《参考図書等》

- ・アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート（学研）
- ・シリーズ「発達と障害を考える本」①④（ミネルバ書房）
- ・高機能自閉症・アスペルガー症候群及びその周辺の子どもたち（同成社）
- ・「実力を出しきれない子どもたち」（NPO法人・えじそんくらぶ）

《相談機関》

- ・各教育委員会の教育センター
- ・心の教育総合支援センター

（長崎大学）



発達障害があるかどうかは軽々しく判断せず、相談機関や医療機関などに相談することが大切です。また、問題行動の場面ばかりが出ていますが、発達障害の子がいつも問題行動をおこしているわけではありません。

このシリーズでは、発達障害の特徴的なさわりの部分だけを紹介し、もっと詳しく知りたい方は、書店で関係図書を求められるか、インターネットで検索して調べてみてください。

聖書

豆知識



主の降誕について・・・



Q.

12月になると、街中ではクリスマスの飾り付けがあちらこちらに見られ、どうしても主の降誕の季節が到来したのだと感じてしまいます。もちろん教会においても、新たにお生まれになる主メシアを迎える準備を「待降節」を通して着々と進めていきます。その準備として、私は福音書に描かれている「主の降誕」に関する箇所を読んでみました。マタイ福音書を読んでいる時に、面白い表現に目が留まりました。それは、1章21と22節にある「…マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」「のすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」という表現です。つまり旧約の預言者を通して、救い主メシアがお生まれになるということがすでに言われていたのだということに、改めて気付かされました。そこで旧約聖書のどういうところに、この出来事がほのめかされているのか教えてください。

A. 言われる通り、マタイ福音によれば、主メシアが生まれることは、かつて言われていたことがその通りに実現したということを物語っています。

このことを思うとき、私たちの救い主が生まれるということには、父なる神による救いのご計画の壮大さ、また人類に対する計り知れない愛が自ずと感ぜられます。

ところで、お読みになったマタイ福音にはすでに二ヶ所、旧約からの引用があります。それは指摘された箇所の直後にある23節の表現です。そこには、「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」と言われていますが、明らかにイザヤ書7章14節からの引用であることが判ります。この世に生まれて来る救い主は、おとめが身ごもり、そのおとめから生まれて来る子であるとイザヤは預言しているのです。事実、福音書を読むと、マリア様が聖霊によっておとめのまま身ごもり（マタイ1:18）、救い主をお生みになっていきます。次の箇所はマタイ2章6節なのですが、「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で、決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。」と言われ、小預言者の一人であったミカの書の5章1節から引用されていると思われ（ミカ書と多少表現が異なりますが）。このことについては、ヨハネ福音でも取り上げられています（7:40-44）。ヨハネを見ると、人々はイエス様がガリラヤ出身であると考えていたようですが、しかしヨハネ7:42（メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。）にあるように、実際にはベツレヘムで生まれました。このように、イザヤやミカの預言の通り、救い主はこの世に御出でになったのです。マタイで言われていることは、まさにイエス様に関する旧約の預言の実現なのです。

まだ他にも旧約聖書にはメシアに関する記述がありますが、中でもメシアに関して重要なことは、**ダビデの子孫である**ということです。先ほど見たヨハネ7:42から、メシアはダビデの子孫であると分かれますし、何よりマタイの最初にある系図（ルカ3章の系図も参照）がそのことを物語っています（特にユダヤ人たちにとっては、重要なことだったようです）。この事実は、サムエル記下と詩編で示唆されているようです。サム下7:12、13で神はダビデに、「あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をどこしえに堅く据える。」と語っています。また詩89:4、5では、「わたしが選んだ者とわたしは契約を結び、わたしの僕ダビデに誓った。あなたの子孫をどこしえに立て、あなたの王座を代々に備える、と。」と言われています。これらは、ルカ1:32で、生まれて来る子について言われている、「その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。」と合致します。このことから、サムエル記下や詩編においても、ダビデに言及しながら、イエス様のこと言及されているのだと分かります。

長い歴史の中で、メシアの到来という神のご計画は準備されてきたのです。今、私たちも、その歴史の中に招かれています。それを考えると、クリスマスは単なるお祭りではありません。私たちの救いに関係する、とても大切な出来事です。今年のクリスマスも、このことを意識したいものです。

(湯浅 俊治)

一薩摩の殉教者一 レオ税所七右衛門



「父なる神よ、救いのみ業にあずからせるため、
あなたが招きになったレオ七右衛門は……」

鹿児島県にある川内教会の主日のミサ後、長年にわたってこの「レオ七右衛門の列福を求める祈り」が唱えられている。以前、数年ぶりに唱える祈りにもかかわらず、すらすたと口から出ていたことに自身非常に驚いたことがある。小学生のころから唱え始めたこの祈りは、どうやら身体に染み付いているようだ。そして、今年大きな喜びの便りもたらされた。二十数年に亘って続けてきた祈りが、ようやく神様に聞き入れられたのだ。

薩摩の殉教者レオ税所七右衛門敦朝（さいしよしちえもんあつとも）は「188殉教者」の一人として数えられている。1602年、数名のドミニコ会士が鹿児島にたどり着いた。当初から困難を極めた宣教活動はこの殉教者を与えてくださるために導かれているかのようにも思える。本格的に布教するために建てられた京泊の教会に一人の侍が訪れる。親友であるパウロ吉右衛門からキリストのことを聞き、もつと詳しく知りたいと頻りに通うようになった。彼が洗礼を望んだ時、彼自身が仕えていた領主北郷はすでにキリシタンを禁じており、命の危険を心配するモラレス神父に微笑んでこう答えている。「神父様、わたしはお話を伺って、救いというものがあり、たとえ生命を失うことがあっても、わたしを教会から離

れさせることができるものはないでしょう。」実際、レオ七右衛門は受洗から117日後に殉教を遂げている。

小学生の頃、街中にある教会を朝4時ごろ出発し、川内川河口にある京泊教会跡地まで、2時間以上かけて毎月一回、ロザリオを唱えながら巡礼したことを思い出す。巡礼のことも、レオ七右衛門のことも良く分からず、時には小さい弟妹をおんぶしながら眠い目をこすり、ひたすら歩いたものだ。自転車に乗ってパトロール中の警察官に「夜逃げですか？」と声をかけられたこともあった。訳が分からないまま、ただ覚えていることは、昔、この道を歩いて京泊教会に行ったレオ七右衛門と同じ道をたどっているのだということだけである。現在の巡礼は定期的には行われていないようだが、毎週唱えていた祈りとさまざまな体験は私の召命にも深く関わっている。

殉教者の血を礎に持つ信仰共同体は多くの司祭・修道者の召命の恵みを持つように思う。その信仰は過去のもの、終わったものでなく、今を生きる私たちに受け継がれているからだ。数年前、長崎市勝山町（桜町小学校内）にサント・ドミngo教会跡資料館ができた。この教会跡地に建てられた教会こそ、レオが祈り、教えを聞き、洗礼を受けた教会である。モラレス神父は薩摩で宣教師退去命令の後、教会とレオ七右衛門の亡骸を船に積み、長崎までやってきたのだ。その後、レオの遺骨はマニラへと渡っている。現在その所在は失われたが、レオを見守ったマリア像はマニラのサント・ドミngo教会で「日本のマリア様」としていまでも微笑みかけている。レオ七右衛門の残した信仰は、彼の子ども達から私たちに受け継がれ、その痕跡は史跡として残っている。

このところ京泊教会跡地に、多くの人々が訪れているようだ。以前敷の中にあった教会跡地も何度も草木を刈り、数年後ようやく今の川内川河口を見下ろす絶景になった。父はこの場所の近くに住む信徒からか、時折、巡礼者のためにガイドのようなことをしているようだ。レオの信仰を現代の人に伝えることはうれしいうで、喜んで出掛けて行く。

私たちにはそれぞれ信仰の出発点がある。両親をはじめ、家族、周りの人々のかかわりの中で私の信仰は育まれてきた。レオ七右衛門のように死を前にしても、恐れず、その先におられるまことの救い主に目を向けて、自分自身の信仰生活を歩みたいものだ。

石田 望（愛宕教会 司祭）



188殉教者が残したもの

— 幼い殉教者 —



有馬川の中洲

◆有馬川での幼い殉教者たち・・・

1613年10月7日(ロザリオの聖母の日)に有馬家の本城であった日野江城の前を流れる有馬川の中州では、有馬の教会を代表して、3家族、8人が柱に縛られ、火あぶりにされて殉教しました。その中にはマグダレナ林田19歳とデイエゴ林田12歳がいました。

有馬の教会には、信者たちの信仰生活を助けるために、「サンタマリアの組」、「ご聖体の組」、「ミゼリコルディアの組」などが組織されていました。1612年、有馬で迫害が始まると信者たちは城下町に新しい組、「殉教の組」を結成しました。これは殉教できるよう祈り、苦行をもって神のおん助けを求め、信心会でした。この大人の模範に倣って少年たちも「子どもの殉教者の組」を作って、大人たちに負けないほどの熱心さで祈り、苦行に励んでいました。12歳のデイエゴ少年は、このとき、有馬の「子どもの殉教者の組」のかしらでした。彼は、仲間とともに殉教の恵みを受けるために祈り、組の集まりでは皆を導き、ともに苦行に励んでいました。殉教までの記録は、素朴なところの少年が、精神的には立派な大人に成長していたことを伝えています。

有馬の信者たち2万人は、早朝から両岸に集まり、ともされたりうそくとロザリオを手にして祈りながら見守っていました。

有馬川を渡る時、一人の役人がデイエゴ少年を背負って渡ろうとしましたが、「歩かせてください。イエス様はカルワリオ山へ歩いて行かれました」と、それを断りました。十字架の苦難を経て栄光へと変えられる救いの神秘を、神様は幼い子どもに示しておられたのでしょうか。殉教がイエスに導かれる至

福への道であると、彼らは信じていました。パライス(天国)でイエスとともに永遠の幸せが待っていることを教えられ、疑うことなく信じていました。だから、イエスがなされたように、少年も歩くことを選びました。

父レオ林田助右衛門、母マルタ、姉マグダレナ、そしてデイエゴ少年は、それぞれの柱に縛られ薪に火がつけられました。

母マルタは燃え上がる炎と煙の中で、天を仰ぐようにと励ました。姉のマグダレナは綱が焼け落ちるとひざまずき、足元の燃える薪を手にとりて頭上にかざし、燃え尽きることのない信仰と感謝のしるしを示すと、力尽きて静かに横たわりました。

信者たちは殉教者の遺体を執行人の手から奪い、長崎に送りました。殉教地で遺体を拾い集めた信者たちは、続いて自らもキリストの証し人となりました。

1614年の宣教師の国外追放のとき、殉教者の遺体はマカオに運ばれ、1995年マカオの中国返還の際、彼らの遺骨はふたたび長崎へ戻ってきました。

有馬の教会の最初のかかしは、神が信仰の神秘を「幼子のような者にお示しになった」ことを示して、それによって、教会がイエスとともに喜びにあふれて感謝することを教えています。

【参考資料】

- * 「殉教者を想い、ともに祈る週間」
日本カトリック司教協議会
殉教者列福調査特別委員会・編
- * 「ペトロ岐部と187殉教者」
日本カトリック司教協議会
列聖列福特別委員会・編

9月末には、ペトロ岐部と187殉教者の列福式が、2008年11月24日に決定した。

また、同じ時期に日本カトリック司教協議会・列福列聖特別委員会から「ペトロ岐部と187殉教者」というタイトルで小冊子が出来て、各家庭に配られ、私たちが殉教者の生き方を知ることによって、どのように自分たちの今の生活に生かすことが出来るかを、考え、思い巡らす機会となっている。

本紙・前号で信仰教育委員会が、子どもたち(家庭も含めて)に殉教者を紹介し、子どもたちの絵と作文を募集することになっていることを記載したが、今回は、長崎の殉教者(西坂 4人、島原・雲仙 29人、生月の殉教者 3人、有馬の殉教者 8人、計44人)の中から、幼い子どもたちの殉教を、参考資料の中から抜粋し、紹介することにした。

第一回

地区長会議



去る11月9日、地区長会議が開かれました。この名称のもとに開かれたのは、はじめてです。

これまで地区長の集まりは、教区顧問会の名のもとに、主に宗教法人カトリック長崎大司教区の責任役員会としての機能を果たしてきました。なぜなら、7人おられる地区長は、同時に顧問会議のメンバーも兼ねているからです。

しかし、地区長は法人役員としてのみならず、長崎教区の宣教・司牧という、神の前の責任を果たすにあたっての、執行部として関わらなければならない立場にあるので、さらに突っ込んだ話し合いの場が必要ではないかということ、顧問会とは別に開かれることになったものです。

さらにまた、地区長は、地区評議会会長として七つの地区の宣教・司牧の運営の責任者

でもあります。ご存知のように、長崎教区は2006年度から、小教区・地区・教区評議会という信徒・修道者・司祭（もちろん大司教も）が同じ場でいっしょになって、宣教（福音化）の使命を果たすための態勢を整え、その活動を開始しております。

そして、代表者の集まりである地区評議会会議の集まりを、奇数月に行って、いろいろな課題を持ち寄り、その解決策を探す作業が始められています。

このような組織が、機能不全に陥ることなく、かえって活性化されるためには、情報伝達のための管が通りのよいものであるか否かということが大きな課題となります。

地区長の、地区評議会会長としての集まりは、この管の通りをよくするために、計り知れないほどの役割を果たすことになるでしょう。

決まり切ったことを、決まり切ったように話すのではなく、これまでタブー視されてきたことも聖域化せず、排他的発想を捨てて、多少痛みを伴う事柄に対しても、向かい合う勇気を持つことができれば、地区長会議は、これまでにない、特別な光を見出す場になるに違いありません。

11月9日は、最初の会議であったにもかか

わらず、活発な議論が交わされました。

顧問会の場合、大司教が召集し、大司教がリードする会議となりますが、今回は、7名の地区長だけの水入らずの会議となりました。

そのためのなかどうかはおもかく、上から押し着せの事柄を、通り一遍に処理していく体質から脱却しよう、という熱気に満ちたものになりました。

その脱却のための具体的行動として、毎年2月に開かれる、司祭研修会への取り組みを進めるということで合意いたしました。

そのテーマを来年行われる「列福式に向けて」ということにしほり、司祭としての、現在の信仰体質にまで、メスを入れるような研究会にしようということでした。

誰が言うから、言われるからではなく、神の前に自己責任を果たそうとした、殉教者の精神が、ますます定着していくことを祈りたいものである。

列福式に向けて



生活教会 の中の



大曾教会

フォトフラン 山本 富夫

大曾

大曾湾に面する高台に建つ教会堂。対岸から見えるその容姿は、まさに信仰の証し。

最初の教会堂は一八七九年、裏迫に建立された。現教会堂は一九一六年八月、レンガ造りの教会堂として完成。敷地の造成、資材の運搬など信徒の協力を得て実現。旧堂は土井の浦へ移築した。

一九五一年、小教区として独立。折島、跡次、樽見、熊高、猪の浦が巡回となった。

九十年余を過ぎた教会堂は今、時代を生き抜いた信仰とその偉功を輝かせている。